

開催にあたって

塩は人が生きていく上で欠かすことができない、しかも他に代わりのきかないものであり、私たちの食生活においてなくてはならない調味料です。今日では当たり前のように手に入る塩も、昔を遡ると作るのも大変な、貴重なものであったことがうかがえます。日本には岩塩や湖塩がなく、海水から塩を作る必要がありました。しかし、雨が多く湿度も高い日本の気候は、日光のみで海水を蒸発させ、塩を作るのには適していません。そこで人々は、濃い海水を作り、それを煮詰めて塩を取り出す煎ごうと呼ばれる独自の方法を編み出しました。そしてその濃い海水を作る工夫が揚浜式塩田や入浜式塩田であり、瀬戸内海に面する安芸津でも行われていました。

今回の企画展では、この塩田の歴史を紐解きながら、常に海と共に生きてきた安芸津の歴史の一端を取り上げます。どうぞごゆっくりご覧ください。

最後になりますが、この場を借りて、本企画展に御協力いただいた竹原市教育委員会、二宮康成様をはじめとする皆様に、お礼を申し上げます。

東広島市教育委員会

参考文献一覧

- ・『安芸津町史』（2011）
- ・『安芸津風土記』第20号（1975）
- ・『安芸津風土記』第32号（1978）
- ・二宮康成『江戸時代の木谷村の入浜式塩田』（2020）
- ・『国史大辞典』（1985）
- ・『塩の民俗資料緊急調査報告書』（1974）
- ・『たけはら歴史読本』（2019）
- ・『東広島・竹原・賀茂・豊田今昔写真帖』（2004）
- ・『広島県史』中世（通史2）（1984）
- ・『広島県史』近世1（通史3）（1981）
- ・『広島県史』近世2（通史4）（1984）
- ・『広島県史』近代1（通史5）（1985）
- ・『広島県大百科事典』（1982）

広島は塩づくりの中心だった！？

^{せとないかい}瀬戸内海に面する中国地方は、古くから塩づくりの中心地でした。気候が温暖、雨の日が少ない、波も少ない、^{すなはま}砂浜が多くあるなど、非常に条件の良い土地だったからです。また、海の交通も発展しており、^{しょうひち}消費地である^{きない}畿内に運ぶ上で大変便利でもありました。

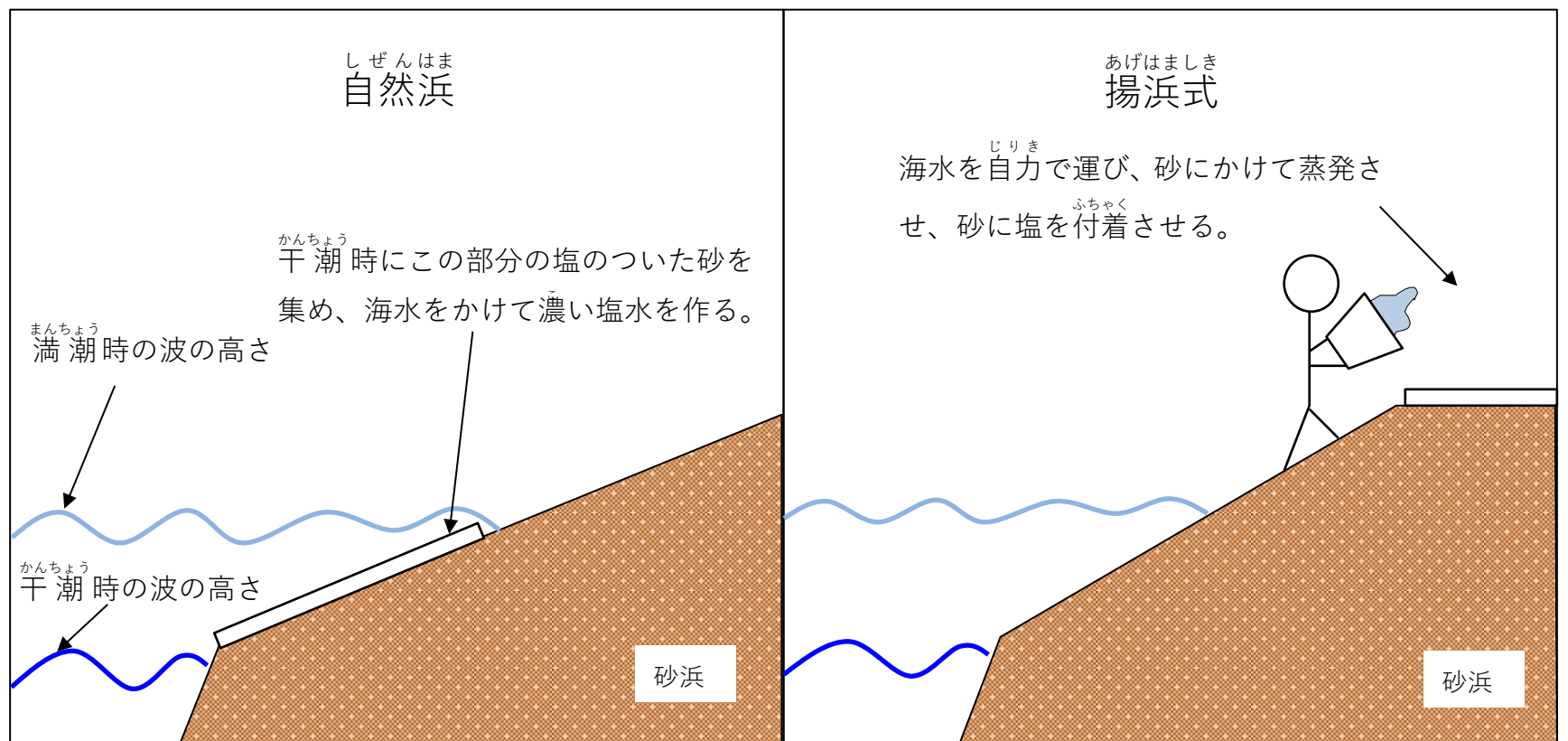
^{こうりつ}効率の悪かった当時の塩づくり

しかし、江戸時代までの塩づくりは大変な作業でした。^{がんえん}岩塩のない日本では、海水を蒸発させて塩をつくる必要がありましたが、30gの塩を作るためには1リットル近い水分を蒸発させなければならず、^{こうりつ}効率が良いとは言えません。そこで人々は、^こ濃い塩水を作る工夫をしました。

- 1)海水のついた砂を乾かし、砂に塩分を^{ふちやく}付着させる。
- 2)砂に海水をかけて^こ濃い塩水をつくる。
- 3)^{につ}煮詰めて水分を蒸発させる。

という^{こうてい}工程で塩を作るのです。この1)が大変です。砂を乾かさないといけないので、波が届かないところで、砂に海水をかける必要があります。海から海水を^く汲み、波の届かないところまで^{じりき}自力で運び、^{すなはま}砂浜にまくというのは大変な重労働で、^{こうりつ}効率も悪いものでした（これを^{あげはま}揚浜式塩田と言います）。

条件が良かったとは言え、^{せとうち}瀬戸内の人々は大変な苦労をしながら塩づくりに^{はげ}励んでいました。そしてこの問題を解決してくれる画期的な方法が、^{はましき}入浜式塩田でした。

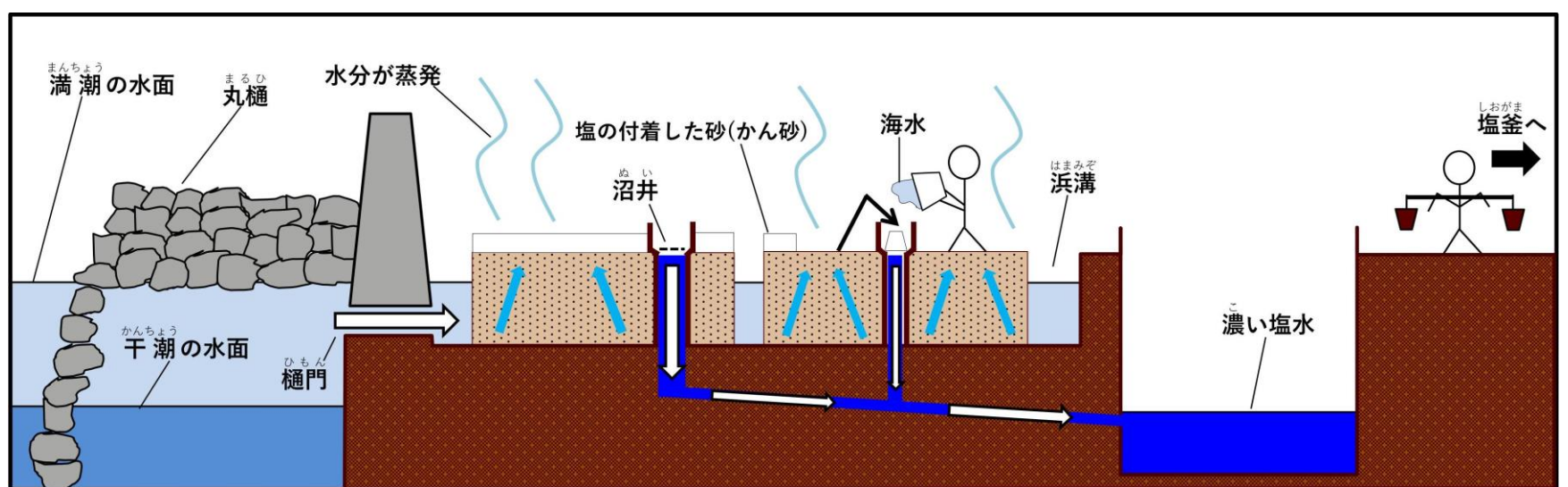


画期的だった入浜式塩田

「波の届かないところで海水を砂にまく」という作業を、潮の満ち引きと毛細管現象を利用して省略したのが、江戸時代に開発された入浜式塩田です。入浜式塩田では以下の方法で濃い塩水を作り、塩を取り出します。

- 1) 堤防を作り、満潮のときに海水が入り、干潮のときに海水が入らない高さに、樋門という海水の取り込み口を作る。
- 2) 満潮時に樋門から入った海水が、塩田に巡らせた溝を流れる。
- 3) 毛細管現象によって砂に海水がしみこむ。
- 4) 砂を日光と風で乾かし、塩を付着させる
- 5) 塩の付着した砂を沼井に集めて海水をかけ、濃い塩水をつくる。

この方法は揚浜式と比べて労力がかからず、より大きな規模で塩を作ることを可能にしました。



図：木谷の入浜式塩田(『たけはら歴史読本』を参考に作成)

一大ブランド「竹原」

最初に広島で入浜式塩田を始めたのは竹原でした。竹原では正保3年(1646)から新田開発を行いました。海の近くの低い土地は塩気が強かったため、農業には不向きな土地でした。その結果、しばらく放置されていたのですが、竹原に薪を買いに来た赤穂(兵庫県赤穂市)の商人が、「このような土地は塩浜にするのが良い。」と塩づくりを勧めました。それを聞いた役人が試しに造って見たところ、質の良い塩づくりに成功したため、慶安3年(1650)に31軒、寛文4年(1664)までに85軒の塩浜が造られました。

竹原塩は主に船を使って運び出され、畿内や東北、さらには江戸で取引されました。安くて品質が良かったため、「竹原」は塩の一大ブランドとして全国で名を馳せていったのです。

安芸津に伝わる入浜式塩田

竹原で大成功を収めた入浜式塩田は、瀬戸内地方の各地に広がっていき
ました。安芸津もその一つで、元禄9 年(1690)に柄三右衛門が木谷村の二
馬手で入浜式塩田を造りました。これを機に安芸津では各地に入浜式が
導入され、それまで規模の小さかった塩田も大きくなり、港から畿内や東
北に運ばれて取引されるようになりました。

また、竹原の塩田に浜子が安芸津から働きに出たり、塩田用に木を伐採し
て薪を売ったりするなど、塩田は当時の安芸津の人々にとって大きな働き
口となっていました。

築調年	場所	規模	沼井数
元禄3年(1690)	木谷村二馬手	2反1畝	119
元禄6年(1693)までに	木谷村本江(2ヶ所)	12反7畝	151
元禄9年(1696)	木谷村二馬手	2反5畝15歩	119
文政4年(1821)	木谷村宮沖新田	1町4反3畝	140
天保3年(1832)	三津村瀬野屋新開か	1ヶ所	不明
天保4年(1833)	風早村陣凱浜	2町9反5畝12歩	不明
天保5年(1834)	風早村水除浜	2町8反12歩	不明
天保8年(1837)	小松原村新開	畝数1町2反	不明
天保10年(1839)	風早村観音浜	1町7反8畝1歩	不明
天保12年(1841)	多くの塩田がコストの安い石炭に転換		

表：安芸津の塩田一覧(『安芸津町史』・『安芸津風土記 第 20 号』をもとに作成)

訪れる塩田不況

全国区的一大ブランドとなった瀬戸内の塩ですが、開始 60 年以降、苦境
に立たされることになります。あまりに塩を多く作りすぎたために価格が
暴落し、不況を迎えたのです。当時の竹原の記録によると、明暦元年(1655)
には塩浜 1軒で年間銀 900 匁の利益を得ていましたが、享保19 年(1734)
には 463 匁に減少していました。これには海水を蒸発させるための燃料
代が 2.7 倍になったことも影響していました。燃料代は必要経費の約半
分を占めていたからです。

そこで瀬戸内の人々は、十州同盟を結成し、日が短い秋と冬に一斉に休
業することで、経費の節約と塩の価格の回復を図りました。また、塩田で
の作業を 1 日おきに行う替持も行われました。こうした工夫により、安芸
津を含めた瀬戸内の塩田は、規模を縮小しながらも江戸、明治、大正、
昭和と続いていくことになります。

コスト問題の救世主！？石炭焚き

塩田は弊害を生み出すこともありました。その最たる例が石炭です。

塩田経営にかかる経費のうち、半分近くを占めるのが、水分を蒸発させるための燃料代でした。経営者はこの問題を解決するために、濃い塩水を煮るのに石炭を用いるようになりました。石炭を用いると、通常の薪と比べてコストを3割～4割程度削減することができるからです。安芸津では、天保12年(1841)ごろに多くの塩田で使用されるに至りました。

しかし、石炭焚きは、煙による農作物への悪影響が出てしまうというデメリットがありました。竹原では北風が強いため、煙が吹き払われましたが、安芸津は北に山があり、煙が吹き払われることが少なかったのです。

反対運動、さらには裁判へ…

そのため各地で反対運動が起こりました。風早の観音浜では弘化2年(1845)に石炭焚きを試したところ、村民が鍬や鎌などをもって塩釜を打ち壊す勢いで抗議し、石炭焚きを中止しました。風早村ではこの問題が明治に入っても続き、塩田側は弁償金の支払いや石炭焚きの時期の限定などの歩み寄りを見せながら交渉しましたが、決裂してしまいます。

そしてついに塩田側が提訴を行い、裁判沙汰になりました。村民側は

- 1) 煙によって農作物の生産量が減少する。
- 2) 家屋に煙が入り込み、人々に不快感を与える。
- 3) 草に灰が付くことで牛馬が草を食べなくなる。
- 4) 塩田開始の際、石炭焚きを行わないという取り決めがあった。

という点を主に主張しました。しかし、結果は村民側の敗訴に終わりました。理由は以下のように裁判所が判断したためです

- 1) 地租改正によって塩田の土地所有が認められ、他人を妨害しない限り土地利用の自由がある。
- 2) 村民側の訴えには科学的な根拠がない。
- 3) 石炭焚きの取り決めが、具体的な契約としてなされていない。

入浜式塩田は人々に恵みをもたらした一方で、時に公害問題も生み出してしまったのです。

役目を終える安芸津の塩田

昭和 5 年(1930)に生産性の低い塩田の整理が行われました。台湾や中国から非常に安い塩が入り、塩が余るようになったからです。安芸津の塩田もその対象となり、昭和 7 年(1932)頃から記録に見られなくなります。江戸時代から続く安芸津の塩田はここに役目を終えました。しかし、それから 13 年後に思わぬ形で塩田が再登場します。それが木谷小学校(当時は国民小学校)の塩田でした。



昭和 5 年ごろの二馬手の塩田(山平恒夫氏提供)

幻の“学校塩田”

木谷小学校が広島県の製塩指定校になったのは、昭和 20 年(1945)春のことでした。小学校の校庭を塩田とし、近くの海から満潮時に海水をくみ上げ、塩づくりを行いました。太平洋戦争中とは言え、小学校(当時は国民学校)の校庭に塩田を造るのは珍しいことでした。塩づくりの本職の人がおらず、機材も不足する中、教師と上級生は研究を行い、気象観測を行いながら懸命に取り組みました。1 年生は小石を拾うなど、学校全体で励みました。満潮が夜の時には遅くまで作業が続き、疲労で倒れる人も出る過酷な作業だったと言います。それでも当時の児童は不満も言わず、まじめに働きました。

この塩田は、指定された年の夏には終戦、昭和 22 年(1947)には塩田が廃止されているため、短期間の幻の学校塩田となりました。

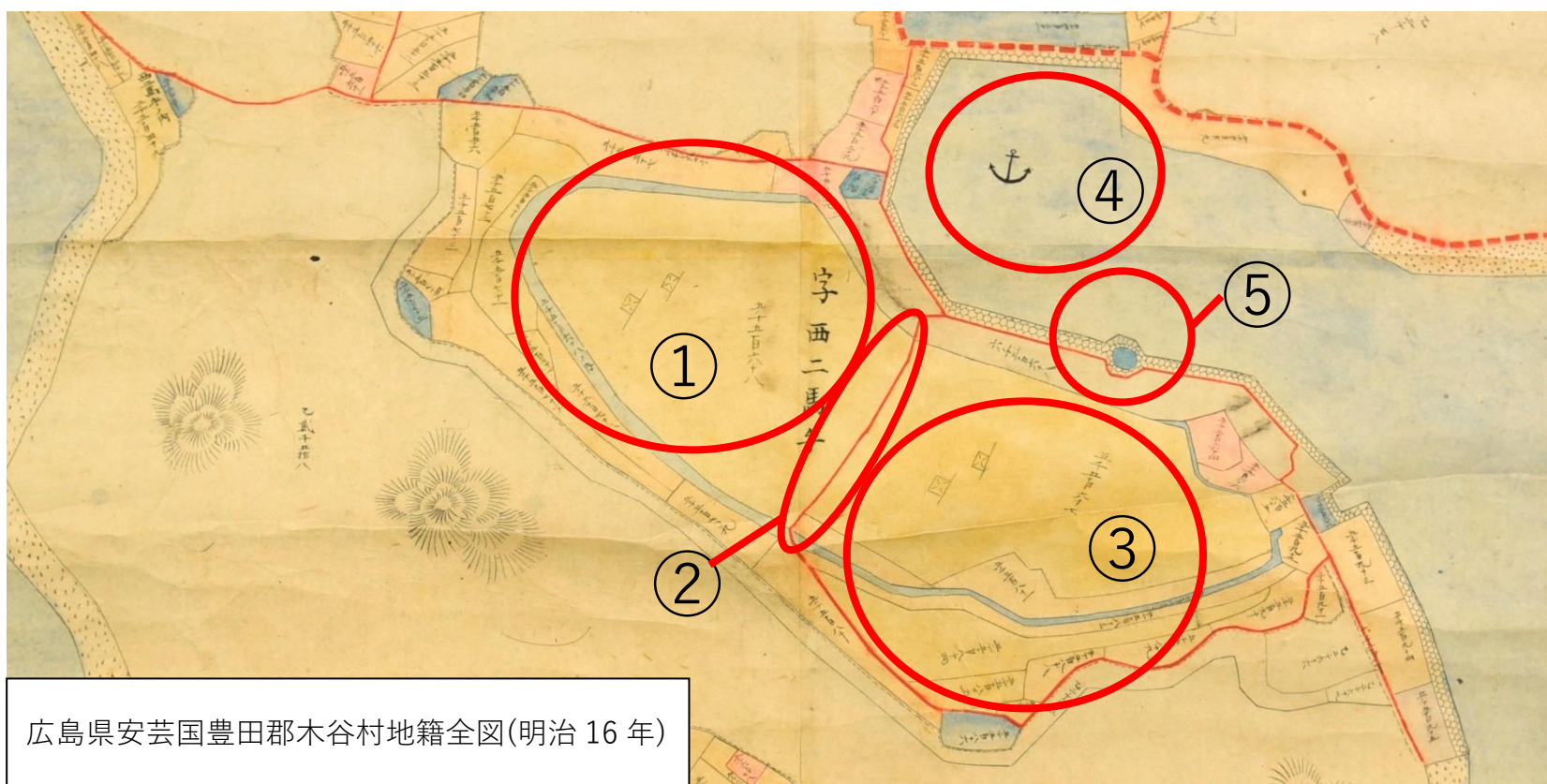


木谷小学校の塩田の様子(二宮康成氏提供)

6 今も残る塩田の遺構

安芸津町の二馬手には、丸樋や塩釜神社など、かつての塩田の遺構が残されています。

是非現地に足を運び、江戸から昭和まで、安芸津の産業の一翼を担った塩田の歴史に触れてみてください！



広島県安芸国豊田郡木谷村地籍全図(明治 16 年)

①③塩田推定地

②浜の中道④二馬手港

⑤丸樋

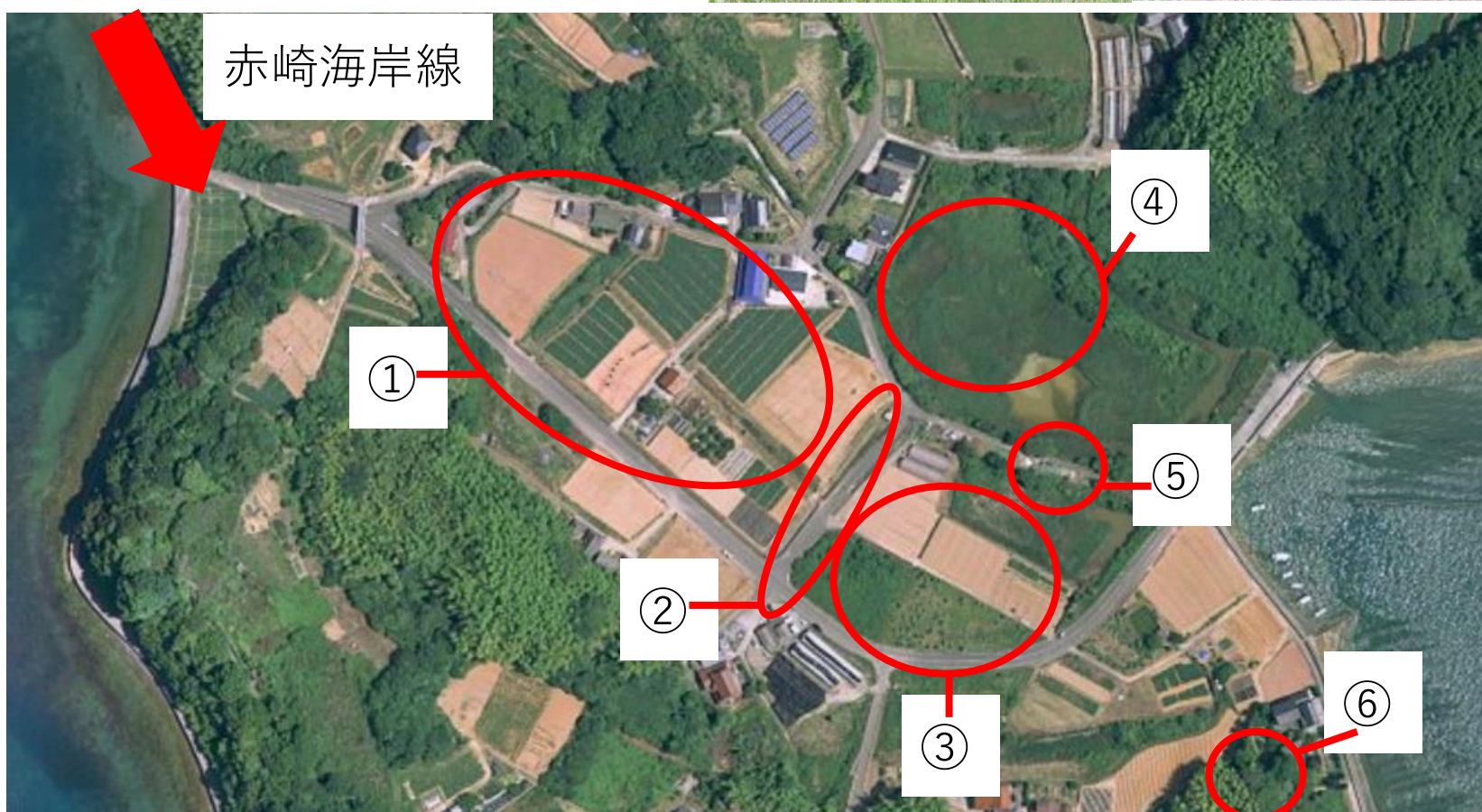
⑥塩釜神社

海水を焚く石窯は 20 日～30 日、早くて 5 日で壊れたため、長く使えるよう、ここでお祈りをしました。

海水の取水口を波から守るための石積みの施設



二宮康成氏提供



赤崎海岸線